

知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌 [ココナッツクラブ]

# COCONUTS CLUB

August 8  
2021

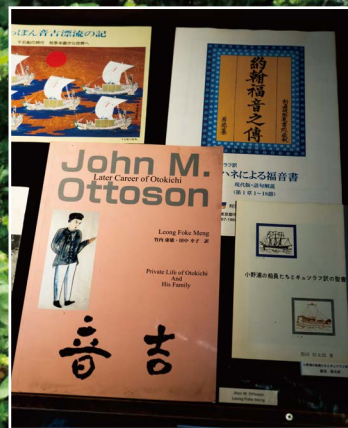
音吉がつなぐ、美浜と世界



音吉顕彰碑



# 音吉がつなぐ、 美浜と世界



美浜町が生んだ偉人といえば、真っ先に名前が挙がるのが音吉だ。  
波乱の人生を歩んだ音吉は、時を超えて、美浜町民と世界の人々を結ぶ「友好の使者」となった。  
その音吉の足跡と、音吉の顕彰から始まった美浜町の国際交流の歩みを辿ってみる。

音吉の懐かしいふるさととは、  
音吉のことを忘れていない。



### 小野浦に新施設が誕生

食と健康の館、野間灯台、小野浦海水浴場などがある美浜町の小野浦地区に今年五月十六日、新しい施設が誕生した。その名は「廻船と音吉記念館」。江戸時代から明治時代にかけて野間や内海を拠点に太平洋沿岸の海運業を担った尾州廻船と、乗船していた千石船で遭難しながらも奇跡的に生き延び、海外で一生を送った音吉をテーマにしたミュージアムだ。

国道247号から少し入ったところにある民家がその記念館である。この家は、廻船業を営んでいた樋口家代々の住まいであり、音吉が乗船したのは樋口家の所有する「宝順丸」だった。この記念館は私設で、現当主の樋口浩久さんが館長を務めている。地元の仲間とともに約六年がかりで準備を進め、このほどようやく開館にこぎつけた。

「亡くなった祖母から樋口家や音吉の歴史をよく聞かされていたのですが、今後は自分たちの世代が

遺品を守り、後世に伝えていかなくってはという思いがあつて、本宅を改装して記念館にしたんです」。

展示室になつている離れと土蔵はいずれも江戸時代の建物。使われなくなつて久しく、かなり破損していたので大修復と化粧直しが行なわれた。離れの方はシンプルながらも洒落たりノベーション建築の装いだが、内部には太い梁が剥き出しで、年季の入つた建物であることがわかる。樋口さんによると、古くは船員や樋口家の奉公人たちの部屋として使われたとか。館内には昔の生活用具、農具、舟道具などさまざまな展示品が並び、中には船内に設置した竈という珍しいものもある。

土蔵には「奉修 不動明王護摩 供二夜三日 海上安全祈願 文化十三年卯月吉良日 象頭山金光院」と墨書された大きな木札が展示されている。文化十三年（一八一六）は江戸時代後期。象頭山金光院は、香川県琴平町にある松尾寺の旧寺号で、海上安全の守護神として全国の船乗りから崇敬を集める

金毘羅大権現を祀る寺。廻船業を営んでいた家ならではの遺品だ。

こうした貴重な品々とともに、音吉の生涯や足取りをわかりやすくまとめた年表と世界地図がパネル展示されている。では、音吉とはどんな人物だったのか、その歩みを辿ってみよう。

### 漂流、聖書、通訳、新嘉坡

音吉は文化十四年（一八一七）頃、小野浦の山本武右衛門の三男として生まれた。十歳頃に地元の有力船主である樋口家の所有する宝順丸の見習い船員として働きはじめ、炊事をこなし、水夫仲間とともに土蔵で寝泊まりすることもあつたと樋口家では伝えられている。

悲劇は天保三年（一八三二）に起こつた。その年の秋、船主の樋口重右衛門以下十四名が乗り込んだ宝順丸は、陶器や米など積み荷を満載し、江戸を目指して出航する。しかし、鳥羽港から遠州灘に出たところで、不運にも大嵐に遭遇

してしまつたのだ。大波と大嵐の中、宝順丸はなす術なく大海をさまようことになる。小野浦にも宝順丸遭難の報が届くが、消息は全くつかめない。やがて乗組員の家族は死を受け入れ、小野浦の良参寺には十四人の名を刻んだ墓が建てられた。そして、樋口家は廻船業を廃業した。

ところが十四人のうち、三人が奇跡的に生き延び、遭難から十四か月後にアメリカ西海岸の最北端のワシントン州ケープアラバに漂着した。その三人は、二十八歳の岩吉、十五歳の久吉、そして十四歳の音吉である。三人はここでアメリカ先住民のマカ族の人々に保護され、数か月後、カナダで交易を行っていたイギリスのハドソン湾会社に引き渡される。この会社は三人を日本へ送り返す策を講じ、漂着の翌年にいったんロンドンへ送り、そこからさらにマカオへと送つた。

マカオで帰還への道筋が付けられるのを待つ間、三人はドイツ人のカールギュツラフのもとに預けられる。ギュツラフは異国での伝道の使

命感にあふれた宣教師で、かねてより聖書を日本語に訳すことを考えていた。三人は求めに応じて翻訳を手伝い、「ハジマリニコノカシコイモノゴクラクトモニゴザル」という一文で始まる世界初の和訳聖書が作られた。

そうするうちに、ようやく日本へ戻るチャンスが訪れる。アメリカのオリファント商会の商船「モリソン号」が、通商を求めて鎖国下にある日本を指すというので、これに同乗することになったのだ。遭難からすでに五年が経過しており、三人の喜びはどれほどのものだっただろう。しかし、その希望は無残にも打ち砕かれる。江戸湾に入港しようとしたモリソン号に対して砲撃が行われ、交渉は無理と判断した船は江戸を目前にして引き返さざるを得なくなる。鹿児島でも寄港を試みるがここでも砲撃を受け、ついに上陸を断念。失望した三人は募る望郷の念を断ち切り、マカオへと戻った。

三人のうち岩吉と久吉は、その後ギョウラフの下で通訳として働い

たようだが、記録はほとんど残されていない。岩吉は四十六歳で頓死したと伝わり、久吉は一八六二年を最後に消息不明となっている。

いっぽう音吉は、その生涯がかなり詳しく判明している。イギリス船の水夫として働いたのち、上海に移り住んで貿易商社に勤務しながら日本人漂流民を援助する活動に取り組んだ。一八四九年には中国人の林阿多と名乗り軍艦に乗船し、通訳として浦賀に來航。さらに一八五四年には長崎にも來航し、日英和親条約の締結に一役買っている。その活躍ぶりからは、聡明で、不屈の精神を持ち、各国の人たちから信頼を集めた、真の意味での「国際人」と呼ぶべき人物像が浮かび上がってくる。

私生活では、上海時代の同僚だったシンガポール人女性と結婚して二男一女をもうけ、それなりの財産を築いたという。一八六二年には、妻の故郷で当時イギリスの植民地だったシンガポールに移住。程なくして日本人として初めてイギリスに帰化し、ジョン・マシュー・オトソン

と名乗った。そして日本では大政奉還の年である一八六七年、シンガポールで死去した。四十九歳だった。

### 草の根国際交流のまち、美浜

時の流れとともに人々の記憶から薄れていった音吉だが、昭和三十六年（一九六一）にわかには脚光を浴びる。初の和訳聖書に協力した三人について調査を進めていた日本聖書協会が中心となって、小野浦に頌徳碑が建てられたのだ。それからしばらく後の昭和五十四年（一九七九）には、ノンフィクション作家の春名徹氏が「にっぽん音吉漂流記」を刊行し、大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。その翌年、クリスチャンで作家の三浦綾子氏が三人を題材にした小説「海嶺」を発表し、三年後には映画化。これらの作品が話題になり、音吉の名が次第に世間に広まっていった。

美浜町で本格的な顕彰活動が始まったのは平成に入ってから。牽引役となったのは、現美浜町長で

音吉顕彰会会長の齋藤宏一さんである。齋藤さんは平成三年（一九九二）から平成十九年（二〇〇七）にも町長を務めているが、音吉に関心を持ったのは町長に初当選する直前のことだったという。

「春名さんの著作を読み、美浜にこんなすごい人がいたのか、と感銘を受けたことがきっかけでした。町長に就任してからは地域の歴史教育に力を入れ、自分でも美浜町の歴史勉強会を立ち上げて音吉の歩んだ生涯や時代背景を学ぼううちに、すっかり音吉に魅了されていったんです」。

まずは美浜町内で音吉の認知度を高めようと、町長就任後の平成四年（一九九二）、「にっぽん音吉トライアスロンin知多美浜」と銘打った大会を開催し、続けて翌年には、五十人の町民が参加した音楽劇「にっぽん音吉物語」を名古屋の劇団とともに制作した。これは美浜町のほか春日町（現清須市）と名古屋でも公演され好評を博す。こうした取り組みにより、宝順丸の漂流から百六十年を経て、音吉が

美浜町民の心に確かな存在として刻まれていった。

そうした動きがある中で平成五年（一九九三）の秋、セントレアの建設に関連して知多半島の自治体の首長がシンガポールのチャンギ国際空港を揃って視察することになり、齋藤さんも美浜町長として参加する。シンガポールといえば音吉の終焉の地だ。足跡を辿る絶好の機会と考えた齋藤さんは、日本人会など関係機関と協力し、公務の合間を縫って音吉に関する調査を行った。すると、音吉の埋葬記録と、音吉の娘と思われる人物の墓が見つかったのである。

これを機に、美浜町は音吉ゆかりの地との交流を深めていった。シンガポールでは翌年「にっぽん音吉物語」の公演が行われ、以後たびたび町民訪問団がシンガポールを訪れるようになった。シンガポールからもホームステイの小学生など多くの人が美浜町を訪れており、中には現地で音吉の埋葬地が確認され、音吉の顕彰碑も建設された。また、音吉が暮らしたマカオと



友好親善  
日本ボーイスカウト内務連盟長  
貝原俊民  
日本国内務省  
1989.8.1



世界とつながる美浜の人々の心に、  
今も音吉は生き続ける。

上海、一時滞在したロンドンの人々、  
そして三人が漂着したワシントン  
州のマカ族との交流も始まり、平成  
十一年（一九九九）にはマカ族の代  
表者三人を美浜町に招いている。ア  
メリカ先住民族を日本へ招聘した  
自治体は全国的にも珍しいとか。

こうして美浜町は、平成初期か  
ら半ばにかけて県内でも有数の  
「草の根国際交流の活発な町」に  
なった。そして、音吉がつないだ交  
流の縁はその後さまざまな形で  
続いている。近年も、東京オリンピッ  
クパラリンピックに先立ってシンガ  
ポールのホストタウンとなり、昨年  
十一月にはシンガポール人のリム・  
イーシェンさんを国際交流員とし  
て招いたばかりだ。

リムさんは日本語、英語、中国語  
に堪能で、シンガポールで翻訳の仕  
事に就いていたが、かねてより日本  
が好きだったこともあり、外国青  
年招致事業（JETプログラム）に  
応募。これに採用されて美浜町に  
やってきた。役場では企画課に籍  
を置き、交流事業の企画立案、SN  
Sで英語による美浜町の情報発

信、町内の学校でシンガポールの文  
化を教える活動などに従事してい  
る。音吉のことは美浜町に来てか  
ら知ったそうで、音吉や源義朝みなもとのよしかね  
など美浜町の歴史や文化をもっと海  
外に紹介したいと意気込む。

「マリンスポーツが好きなので、海に  
囲まれた美浜町はとても気に入っ  
ています。ゆっくりすごせる町だ  
し、美浜の人はやさしい人ばかり。  
みなさんにもっとシンガポールのこ  
とを伝えたいし、私も美浜のこ  
とを海外に向けてどんどん発信して  
いきたいと思っています」。

音吉から始まった交流は、これ  
からも世代を超えて広がり、世界  
に友好の架け橋を繋げていくこと  
だろう。

#### 廻船と音吉記念館

4月10月の第3土曜日定期開館予定。  
それ以外は予約により開館。入館無料  
美浜町大字小野浦字福島62  
問い合わせ 090-566358946

（取材協力）樋口浩久さん／齋藤宏一さん／リムイーシェンさん  
廻船と音吉記念館／美浜町企画課／美浜町秘書課  
（参考文献）にほん音吉漂流記（春名徹・晶文社）／音吉の足跡  
を追って草の根活動の15年（愛知県美浜町、音吉顕彰会）